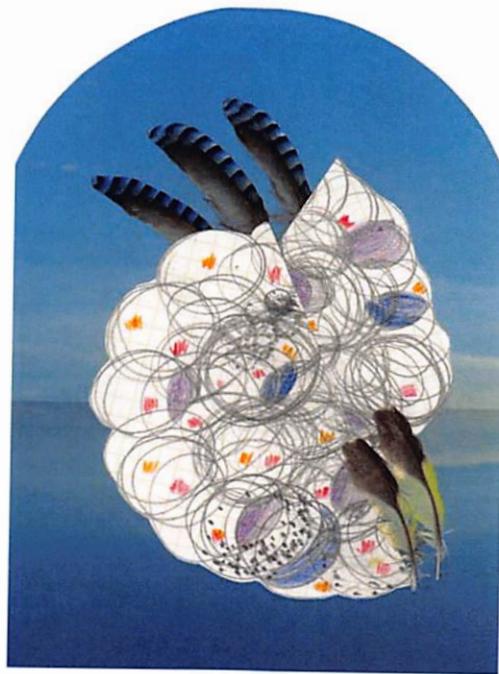


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021.11



令和3年11月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第11号

No.762

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

一〇二一年 一月号 (通巻七六一號)

◇今月の二十首詠……地続きの頃

河野繁子 2

■作品[A]

梅本武義・大浪美雪他 4

A C B A

青田不二子他  
浅霧美佐子他

天野純代他

滝口智枝子他

西田江美子・根岸亮他

田端典子・米原千秋

工藤こずゑ

三好聖三

34

16

42

54

20

55

54

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

55

## 地続きの頃

河野 繁子

昭和八年生まれ。  
昭和三十九年、地中海入会。  
雁グループ長。  
歌集に「雁来紅のうた」「里山の月」がある。

おとなえぬ歌碑たつ丘に自生せるヒゴタイの種ぐうせん賜う

たね芽生えあざみに似たる葉のままに一年ともに思いめぐらす

我の背をこえて一年日高々と蒼みどりの不思議を醸す

おとなえぬかなしみ残り歌碑おもうヒゴタイみどりの蒼ばんぱり

こんなにも伸びるとしらず木の下の陰に時きたりもじやもじやの種

臘梅の枝つきぬけて涼しげな頂き仰ぐ 移植の場所を

大陸と地続きなりし日本に生いし名残りと野草のかなし

ヒゴタイの意味ハリネズミ全身に針をまといて生き継ぎて來し

むらさきの花と書に載るヒゴタイの縁のぼんぼん開くを待てり

香川師の幅ひろの軸掛けんため床の間ひろし塙を払う

家建てに五ミリの狂いに悩みしに老いては斜めの釘打ちつける

家二軒大工雇わず建てしひと物忘れ多々しょぼしょぼ歩む

「おい、山を買った」と書類持ち帰り大蔵省を困らせしひと

設計図あたまの中と指差しておまえの部屋はこここのぐらい

歌会の出来るようにと大広間孫や曾孫も宿しにぎわう

娘の家族となりに住むを幸せと外見にみえぬ淋しさのあり

詐欺師などくれば怯むか子や孫の車五台のとめてある家

峠までも押し寄せてくるコロナ禍にワクチンの列こんなにも人

ワクチンの二度を済ませば乗りて良き鍼医師よりの迎えの車

メビウスの帯に止まれる記憶かも思い出しては消える花の名

# 作品 A

梅本武義 猪

・羊

奥田陽子 鶴み

・羊

・羊

・羊

門と屏の無き家には猪の夜に来る里となりて久しき  
猪がついに知りたり老朽の柵の弱点堵は全滅  
降り続く雨を喜ぶ猪かわざかな崩れ逃さず侵入  
エアガンを撃つ孫見つつと思う害獸駆除の精肉会社  
反撃に柵の上より重き石三個を落とす仕掛けをしたり  
猪も數増え喰うに必死だと曲げた鉄柵を見る妻の言う  
喰うことには必死と聞けば浮かび来る少年の日の貧しき暮し

・森

小野雅子 七月、八月

・羊

月光に高砂百合の白き花紗をかけられて怪しく搖るる  
仄暗き藪に黄の色ひらめけり群はづれたるカワラヒワかな  
大雨となりたる中をポストまでしぶきをあげて車迫りく  
銃口に自ら額をさしいだし体温測定三十六度三分  
梅雨あけて急の真夏日堪へ難くマスクに忍ばすミント一枚  
暑き日の厨にさせるグラスグリーン バセリ一束青紫蘇一茎  
俎に鉢掛けして削り肩くるくるくる木の香のたまり

さざ波の秀をすれすれに糸蜻蛉飛びゆきてのちすず風の立つ  
彼岸花咲きはじめたり川岸ののこり少なき八月を行く  
研究家でもあるまいにとやすやすと手離せる大部の書物返らず  
生ききたる道程に標す幾冊のもはや返らず空となれる手  
傷みくる胸は幾夜か大切の本は残せよと娘の言いくれしを  
本はいすれも身近に置きて離さずと言えるひとりに今は頷かん  
愛ぞしく生きて来しわれ真夜ちかく鎮もる書棚の本をみあぐる

磯田ひさ子 萬

森

北山雪男

残日抄

伊

さみどりの穂を立て稚し川の端に群れたる萬の暑さを払ふ  
群れをなし存らへる葦水の辺の泥探りあて根茎をのばす  
だしぬけに「宇摩志阿斯詞備比古遜神」甦りたり古事記にありし  
少しづつ予行演習するに似て一人のランチ一人の散歩  
傷深く負はないやうに飼ひ馴らすいづれ一人になる日のあらむ  
しぶき上げ朱の両足をブレーキにかかるがも全く着水したり  
橋の上に驟雨至れば広重の雨のごとくに人走り出す

神田鉢子 命

大

久びさにマスクをはづし散歩する雨の上がりし人の居ぬ道  
降り続くこの大雨に打たれしか蟬のむくろがあふ向けて散る  
うす紅をさつと刷きたる雲流れ夕空染めて日は沈みゆく  
つねは優しき小川の流れ猛りつけふは獨りて怒濤となれり  
土石流が家押し潰すその下に人の命のはれ消えゆく  
忘れられ送迎バスに幼逝く室温五十度の熱射の中を  
絶え絶えに母を呼びけむ送迎バスに五歳の男の子の命絶たれぬ

菊地栄子 愉福

・湾

妹よ強情張つてゆずらざるあの日の記憶はでたらめである

甥の婚の夜の宴を逃しはタイに旅立つ翌日のため

悔しくも油断をしたり取り集めの三度目の時刻外されて無し

筒状の花びらの列乱すなきダリアに対す一目置きて

日々にさえすりきたり平屋なるひとり居まれに愉福のあり

ときの間の過ぎゆきなれど咲き立ての朝顔の花かすかに揺らぐ  
したたかな笑く雨に落ちもせて青き柿の実したたかに生る

沖縄に負債永々押し付けて戦後日本のバランスシート  
辺野古なる海に捨つとや叔父の骨あるやもしぐれぬ土掘り返し  
そのかほをしかと見るべし核の傘差して恥とは思はぬ貌を  
米軍に詔ふ群が〈参拝〉しまだ彌らるる靖國の靈  
国後は目と鼻の先 晩夏の病む時の間に山巣昏く  
取り交はす言葉と言葉つひに無く野付の浜ゆ遠さかる波  
訊ねたき明日あり九月一日の書架より大杉栄呼び出し

木村文子 ひとり

羊

パイプ椅子テニスコートの隅に置き少女はひとり掃除をはじめる  
おされたる椅子は短く渡い影を地面に落とす正午の大地に  
しばらくのまを揺れておりブランコは夏服の子が飛び降りたのち  
雲間より射し込むひかりがきらきらと輝かせており歩道の水を  
鉄製のベンチも今年は取り去られ広場となりぬ大通り公園は  
一斉に木陰から出て人々はゆらめく午後の交差点を渡る  
公園に誰も入れぬ関係者以外立ち入り禁止の黄昏

草刈十郎 古団扇

・世

幾年も使ひなれたる古団扇今年もまだ新しき風  
炎天の続き幾日今日もまた三十五度にも驚かざりし  
立秋といふのに今日のこの暑さあつけらかんと三十数度  
短夜や夜半に激しき雨の音眠れぬ時の続くを恐る  
八月や戦中戦後の食生活空腹に泣きし頃思ひをり  
ともかくも風を通さん夏座敷大の字となり昼寝をしたし  
コロナ禍の八月となり炎天下頃にはりつくマスク哀れむ

國井節子

秋篠川

・春

秋篠川ゆらりゆらりと流れゆく堤の上を自転車はゆく  
 薬師寺のふたつの塔より靄の湧く雨の上がりし塔の屋根より  
 夏草のむんむんとする川の土堤あまき香もする葛の紅花  
 秋篠の緑の樹下過ぎゆけばあれば木の精、日の斑にをどる  
 夏木立涼しく立つなり鑑真のみ墓の前のみどりの苔は  
 つきつきと発掘さるる文化財平城宮跡はこの土の下  
 夕茜背にして帰る川堤、今日のコースを誰に知らせむ

河野繁子

雨の日

・雁

落し文ひがな一日作る虫窓べ無聊に雨の日過ごす  
 雨雨雨心ほそりに聞こえくる地球を痛めし儂いせよと  
 净化槽だんだん進み澄む川の水には魚の姿見かけず  
 山よりの流れを求めて傾場とし夕へねぐらに帰るらしく  
 住み分けて鳥の工夫もみゆる里白鷺二羽が青田に白し  
 明日には陽の射す予報狂いたる舜り日芙蓉の二輪が開く  
 「おはよう」と芙蓉の花が開きいるガラス隔てて心にタッチ

小林能子

鈴の音

・羊

日に四度点眼間隔まもりつ居眠りするは「余裕」といふべし  
 狹まりし視野にボールが歪むとき足はふはつと空を踏みたり  
 いつかも夢に見たやうな坂赤茶色の土すべらかに吾を走らす  
 スポーツと無縁の日々に鈴の音を頼りのボール競技を知りぬ  
 ゴールボールの決戦ラジオに耳を寄せ氣迫と幽かの鈴の音を追ふ  
 目隠しに鎧へる選手ら床を道ひ音なきボールさへも捕らへる  
 鈴の音の一瞬しづみかき消ゆるボールは見事ゴール決めたり

近藤栄昭

大根

・虹

堺の角大根三本下げられる温き白さが採れたといつて  
 漂える空気濾しいるマスクの目コロナは抜ける身を細くして  
 コツコツと風鎮当たる「ああ時が」収まるまでを大地とゆれる  
 ワンコインで買えぬ自販機見つめつ指先戸惑う硬貨をさがし  
 鎖骨なく首ほつそりとチューリップゆらいでひかる森林公园  
 コロナ禍に臘光のみえきたる急げ並への予約が取れて  
 値上がりの前触れなるか重さ減る萎縮してゆく日本のゆとり

近藤芳仙

古事記

・信

「日本に八百万の神御座します」宮司の古事記社殿にひびく  
 原文の漢字表記の読み難し現在を生きつつ古事記にふれて  
 諏訪大社にタケミナカタが祀られるにはかに神の近づききたり  
 ヤマトタケル東征の道 橫須賀に橘媛の切り絵を見たり  
 かきろひの燃ゆる叢林伊勢の杜に玉砂利を踏む音のひびけり  
 学童の一礼してはくぐりゆく熱田神宮捕の大鳥居  
 三年目の古事記の譲義身に近く神社があれば立ち寄りてみる

坂上直美

令和二年夏

・天

いつ止むかわからぬコロナいつ止むかわからぬ豪雨令和二年  
 虹出でて薄れてやがて消えゆくを一人窓辺にじつと見ており  
 いくたびか虹を見て来はあるときは君と二人で肩を並べて  
 この夏も人と会うこと少なくて空ゆく雲を友と語れる  
 あ、ひぐらし！ここで聞くとは思わざり京都街中いま午前四時  
 築壇にトルコ桔梗とカスミ草 紫と白を君は好めり  
 窓に秋 涼風カーテン揺らしつつ「おはよう」と言う透き通る声



## 関根栄子

鳥の巣

・埼

夕風の立ちくるころと出で来しが無人スタンドに野菜はあらず  
突然の出会いのごとし木の暗にすくと茎立ち夏水仙咲く  
夏草の茂るにまかす休耕田鳥の巣ありき草切ならん  
どのような去年の彈けや夏たけて庭のおちこち伊勢花火咲く  
またの名を星月草の可憐さも小さき庭を席巻しおり  
小さき小さき淡紅の花も束の間に種子びっしりと勢力競う  
人に付き執念く生きつぐウイルスのまた変異株ミュー株という

## 関根和美

「香港ディアスボラ」・埼

母国とは中国にあらず香港と子の妻詠儀蒙州に言う  
旧姓の黄を捨つるとビジネスに利する名なるも中国の影  
預貯金の名義もセキネへ唐突に式後五年の遼巡の末  
婚約と母の葬儀に二度訪いし香港の自由せばまり苦し  
英國ゆ返還ののち朝々をテレビに流さる〈日帝の悪〉  
姉は米妹はカナダ兄弟と父は香港散り散りとなる  
BSの「香港ディアスボラ」ひとごとにあらずと見つむ縁ある國の

## 高尾恭子

夏

・大

生れ出する揚羽をはなつ七月の光まばゆし朝の祝祭  
梅晴れの朝のひかりにもつれつづ黄蝶ゆるりと無限をえがく  
バシャバシャと顔を洗つて歯磨きの飛沫をはらう八月の朝  
飛びたった蟬の行方を追いかけて言い訳ばかりの八月なれば  
病む人のかたえに雨を聞いている内から外から追い詰められて  
悪態をマスクの内に溜めこんで強炭酸をしゅわしゅわはじく  
コロナ禍でなくとも孤食黙食の院内カフェのパスタをえらぶ

## 高津砂千子

ヘチマ

・風

どしゃぶりの雨降る朝も十を越す黄の花まぶしヘチマの花は  
まだあおき柿の実ふたつ道端にまろび激しき雨に打たる  
長雨の愚痴は言うまいミシン出しショーツ縫いゆく本を開きて  
十日間降り続きたる雨はれて庭のおもてはみどりふかふか  
降りこめし雨のあがりし昼夜下り草を抜こうか夢を買おうか  
何十年ぶりの出あいか庭先にカミキリムシの一匹動かず  
一尺を越すヘチマの実ふうらりと揺れているなり長雨のあと

## 滝田靖子

白鳥の湖

・新

たどたどしきピアノの音の聞こえく洗髪のシャワー止めしつかの間  
間違ひの多き「白鳥の湖」を聴いてる真夏の夜の湯船に  
拙くはあるが上達もして隣家の老爺の手遊びのピアノ  
残業の少なき部署に異動すとパート仲間のひそと言ひたり  
戦場となりしテニアン沖縄を逃げのびて語る本当の地獄  
かつてこの国が戦場にありしこともおとぎ話のひとつなるらし  
戦争を知らずに生きてゲーム機のコントローラーに誰を殺める

## 竹下妙子

秋ぶけゆく

・霧

あらくさの名知らずの草も実をつけ命のかぎり個の花咲かず  
ひまはりのめざめし朝け陽を恋ひて三本揃つてひろがりゆけり  
少女この指の白さよ紫の葡萄食うぶる時の眩し  
コスモスは倒れたまま咲き満ちて蜻蛉羽ふるへ静かにとまる  
合掌の形に一つ残りたる百合の蕾も未枯れてゆきぬ  
合掌に一つ残りたる百合の蕾も未枯れてゆきぬ  
もがきつつ生まれ一首書き誌す己にあてし恋文ならむ  
苦しみを苦しと言はず胸のうち赤く燃え立つカンナに言問ふ

## 田 土 成 彦

しまひ湯

・宙

## 虎 谷 信 子

競 技

・伴

菜の花の黄を揺るがせて両側の気動車は来る無人の駅へ  
 次の望までは持つまじ蟋蟀の地にひく鳴く声速切れねど  
 無花果の葉のいがらさは我慢してつけたのだらうイブもアダムも  
 しまひ湯を落としたあの安らぎに下り終電の過ぐる音あり  
 遺伝子は這ひ出せといふ死ぬための地上に蟻は出たくないのに  
 三十六度五分の平熱風邪などに強いといへどさうとも言へず  
 生き変はり死に変はり四十億年の生命の環の今につながる

## 田 土 才 惠

水たまり

・宙

羽ばたきてゆく姿見ゆ十八のはつなつ風に吹かれてひらり  
 その母の背丈はるかに超えし今羽ばたき征かん東の街へ  
 こんなもの持つんじゃなかつたと探しおりスマホの不便そのまた利便  
 一針にひとつ思いを縋り込んで雨降る窓の外はうすみどり  
 誰がためと思うにあらぬ針の目を掬いあげれば浮かぶおもかげ  
 ようやくに芽吹く胡瓜の双葉さえ熱暑の日々に立ち上がらんとす  
 長雨に生れし整地の水たまり鳩の数羽の嬉々と水浴ぶ

## 玉 井 綾 子

ビジネスパーソն

・羊

ジャケットに合わせるパンツの紺か黒 迷える今朝の握力弱し  
 模造紙のごとき疊りを背景に新宿のビルの表情読めず

猛暑日に上着着たままコンコースを歩くビジネスパーソンわれも  
 また彼を考えながらキッチンに立つ吾の指に茄子の専銳し  
 夜が明けて昨日と変わらぬ体調を自覚したのち君を思いやる  
 翌日の食事用意し二回目のワクチンを打ち奇熱を擁す  
 副反応と分かっていても暗い視野狭い夕方 子は吾をまたぐ

きたへたる競技あくなく見る日日よバラリンピックの技はひめこと  
 精一杯 車椅子のわざは勁く 外国人の丈の たくまし  
 思ひがけず 茂山忠三郎のテレビ見る。二人大名 やはりおほらか  
 すきし日は 京大阪と能舞台 友の出演もありしことなど  
 草を喰む猫の背光る 一瞬あり。畦をわたれば ものの芽があまた  
 木瓜の花 はつはつ咲くをかみとりし、白猫二匹 うちてややらむ  
 家猫の居なき生活は なかりしに、今一人ぐらし 野良が相手と

## 中 島 央 子

ありのみ

・森

千葉産の「幸水」求むる製街道蠟ならぬ行列乗用車くるまは  
 母ありし昔はチッキに届きたる香の菓や富士のありの実  
 ひろがたる日傘の生成り色の影夫の忌母の忌七月の果て  
 日の暮のながきを待ちて先立つる子犬に従きゆく草合歎の徑  
 産土の社に人の姿なく遊具をする入りつ陽のかげ  
 散歩する土手に過ぎゆく時早し日の入る方の北へ移れる  
 支払ひはカードをタッチ即終了和同開珎の歴史は終る

## 永 塚 節 子

朝 顔

・銀

白と紅まだらに咲けるあさがおは初めての花名前分からず  
 フレアーのスカートゆらし幼児の踊るに似たるあさがおの花  
 花の名をインターネットに探せどもあまりの数に意欲失う  
 あさつゆの重たさにさえ俯くや小さく薄きその花びらは  
 小さなるあさがおの種に祈りこめ何ごとも無き来夏を託す  
 いくたびもつぼみの無きを確かめつつ支柱をはずす八月の尽  
 来年はもっと沢山咲かせます支柱の数をさらに増やして

## 仲西 正子 四歳

・沖

紙おむつとれて幼が俺のだとポケモン柄のパンツを見せる  
 いつのまに俺がオレのと言い張りてサッカーボール蹴る四歳児  
 四歳が思い出詰まるという箱に今が流行りの妖怪ウォッチ  
 楽しき時はすぐに過ぎゆく四歳に思い出が今生まれてあれよ  
 次次と言葉得ていく四歳が小雨が降ると聞く手のひら  
 おりおりに八人の子を訪ねてか昨日の夢に母現れる  
 四歳に巻き戻さんと思えどもモノクロ写真の一枚もなし

## 萩 葉子 茄荷の花

・銀

茄荷の花ひとつ摘みたり朝早く今日良いことありそうな気が  
 友とふたり「切り株」の中で見あげた丸い空  
 伯母が大釜でゆでたトウモロコシ 热熱の夏休みの思い出  
 「またきてね」大津宿の人の出発まぎわのひとこと 残暑  
 草の露きらきら光る雨あがり友の便り二通とどきたり  
 最近ふるさとの夢が多い母と共にせり摘み七夕秋祭り  
 オールドバカラ展示にもちて「香水瓶のM」

## ばばりようこ 芥菜

・鹿

ひとつぶの飴溶けゆくこの時間もわが人生に組み込まれている  
 天窓から覗きいる月にびたりと目線が合いてしばし向きあう  
 心身をも枯渇せんとや容赦なき酷暑の唯中セミの鳴きつぐ  
 睡蓮を睇いたればメダカ一匹葉かけよりすいと泳ぎたりぬ  
 いっぴきは可哀相とつぶやけば助つ人のあり五匹となつた  
 朱の椀に始笑わせ咲き初めし菜の花も添う雛さまとの夜  
 「私のためにがんばってね」の言の葉を尊びて日記帳の葉となした

## 浜谷久子 時間を植える

・地

半分ねいつも笑顔が玄関にレンジとともに恵比寿南瓜  
 赤黄色大きなパブリカ真桑瓜収穫物の届く夏の間  
 細腕で育てる大物黒光り到来物の八キロ西瓜  
 この夏はどれだけ西瓜を食べただろう自慢の一品与る美味しさ  
 膝体操コピーが届く痛くとも動かしてみる毎日二回  
 南瓜、ミニチ、生姜の効いて大鉢は旬の夕餉の今日のまんなか  
 あめつちの朝な夕なをゆつたりと人は畑に時間を植える

## 浜本 芙美 夢の迷路

・夢

ここに立ち幼な日ひき寄せなつかしき言の葉のみがひとり歩きす  
 西空の残照みつめ祈りおり吾に明日あることを信じて  
 庭先の紅の椿を胸うちに抱きてほとほと朝の徑を  
 寝ねぎわにマンゴロープの景ありて夢の迷路へ入りゆくきさし  
 何となく心は夏へとむかいおり今日立夏とう暦にみたり  
 むかし、愛犬の傷つけし座卓が今ははるかな思い出さそう  
 高い壁のり越えるとき日常の私を守る皆ともなる

## 檜垣美保子 嘴く

・昴

蜻蛉のいのちをはかるつるばらのあたらしき枝かすかにゆれて  
 午前二時夜間飛行の心地して最強の風速に扇風機鳴る  
 約束の時刻は八時掛け時計三つが異なるときを指す朝  
 みきうでの十年消えぬ傷痕を朝ごとはばに問われおり 夏  
 鳥籠をささげて持てるひとのあり追い越せばチチと小さく鳴くこえ  
 妻のためとは言わず義弟蜂退治して明日の入院  
 雨あがり目を凝らし見る山のかげ真夜中ふいに法師蟬鳴く

福田庸子 あかつきの田

・今

船田清子

シルクロード幻想

・天

夕されば森より届く涼風を仏間に通し時と遊べり

たつぶりと水を使へるありがたさ扇状地上にわがくらしあり

コロナ禍に熱中症予防を告げられて昼はいくども濯きものする

あかつきを田の面に光る蜘蛛の巣の面まばゆき嚴かにして

蜘蛛の巣は朝の光をとらへたり宿す夜露を田の面あまたに

穂ばらみを待つ稻の間に輝くは蜘蛛の巣あまた小さく大きく

つかの間を光とらへて映ゆる巣のあかつきの田をにぎはしゆけり

藤田美智子

ハルモニ

・新

ハルモニやオモニの響き聞こえくるテンヂヤンチゲより立つ湯気のなか  
(こらへずに立いていいよ)と雨粒を少しのせたる朴の葉が言ふ  
とうに切れたる縁とあきらめるしはずが夢に親しく語りかけくる  
面と向かつて言はるよりも傷つきぬ耳がとらへてしまひし言葉  
かかへる闇の深さを知らざりき震へる肩を強く抱きたり  
ジャンケルジムの縦横の棒冷えはじめ校庭の隅に夕暮れは来る  
大股にわが前を歩みぬしはずが路地の向かうにふつと消えたり

藤森巳行

ふる里

・銀

ふる里は遠くなりたり去年今年親の墓にも詣でることなし

帰れない代はりに先祖の墓参り弟夫婦に今年も頼みぬ

野沢菜と茄子のおやきが懐かしいおやつがはりの母の手作り

そばかうどんおかす代はりに飯を食ふ貧しき我が家のいつもの夕食

バナナなんて病気になつても食べられない村には売つてゐる店がなかつた  
結婚を決めた我の一言は粗食に耐へると妻は言ひたり

幸ひに料理の上手な妻に出会い長崎ちやんばん皿うどん食べる

喜多郎のシルクロードの曲にのり飛天の領巾雲脳裏に流る

ゴビタンに白楊の緑が延び延びて逃げ水の後をバスは追ひゆく

行くを得ぬファンザの里の並木道杏子の花のかがよひを恋ひ

濡れぬれて蟬の幼虫の背割れずみどりの羽根を伸ばしえず死す

桜木の根方は蟬の墓場にて成虫になり得ぬ怨念や凝る

熊蝉の無念を吸ひて輝けよ来春の桜陽光に映え

コロナ下の五輪の賛否多々あれど選手の氣概は老いを鼓舞せり

牧雄彦

秋のいる

・大

二尺余のメタボの鯉がゆうるりとゆふべ淀みを横切りにけり  
ボスならむ大き真鯉が三尾をしたがへけふも淀みを泳ぐ  
暮れ近き町川ゆるりと泳ざるメタボの鯉がわれを見上ぐも  
幾年も同じ淀みに泳ぐ鯉けふもお前の顔見にきたぞ  
町川の美しとはいへぬ淀みにて鯉群れ泳ぐ夏の夕暮れ  
悠然と淀みを泳ぐ鯉、鰐、時に晩夏の水面にあぎとふ  
石橋の上ゆ見下ろす川の面に揺らぐ光は早や秋のいろ

松浦禎子

同行一人

・羊

西福寺の交叉路を左へ曲るとき俯くおもて晩年の日の  
先生のふるさとなりし四国路に踏み入らずして終うるひと世か

普通寺の地に育ちたる少年は亡き母恋うる日を貫けり

本堂の前に威容の大師像證号千百年 ひとり祈念す

いかほどの人々と歩みし道のりか空海像のわらじゆるます  
西安に青龍寺訪ねし遠き日の般若心經經典の古る

まんまるい今宵の月に手を合わすいつかとは夢同行一人

松瀬トヨ子 パン生地

・沖

宮本靖彦

甲子園

・凌

パン生地をねかせるように歌の稿ふたたび捏ねてポストへ送る  
南国の夕日のかけら降るよう南洋ざくらひしめきて咲く  
マスクして話す言葉の聴きがたく梅雨の季節の重たき時刻  
その死者が五十万人超えるという二十一世紀のコロナ戦争  
ケア室に千切りてはりし野の千草山下清裸の大将  
マスクして佇む庭の日溶りに鉢植えのばらにそよと吹く風  
旧盆のウーケイの日のほの暗く花の香りの線香ゆらぐ

松永智子 影 嵐

あかときの間をゆく影ひとりなりみてあるにつと消えしままなる  
うごくもの何もなくみ間を行く人ひとりなり影としゆけり  
おのが影よりどころとせむあかときの影なるひとりついと消えたり  
かなしめばひとり語りの長くして十階ビルに終り待つ影  
待つといふ未練とうとに待つ影をおのれのものとうべなふ月の夜  
さりながらさりながらをくり返し何もあらねばあかときを待つ  
朝の光さしくる待てばいまだ音なき衢なり人の影みゆ

三浦好博 炎天 銚

大雨と洪水のニュースに見入りたりつきまとふ蚊を気にかけながら  
電柱の影に頭を入れ凌ぐ遮断機の上がるまでの炎天

指の輪に納まる脛の細さかな若き日あまたの山頂立ちしに  
目を閉づればたちまち記憶は遠くなる命のもしご消えゆくもかく  
貧相な自らの骨こめかみと額を揉みたり額関節症  
どうなつた復興五輪またはこのコロナに打ち勝つた証など  
思ひ出すまであかさたなはまやらわそれ出てこぬかあの画家の名よ

真夏梅雨幾重の雲の切れ目より青空一瞬宝石のことじ  
もう着ないベストのブランド・フェニックスこの名でいくつの会社盛衰  
歩道真中山桃の大樹枝葉繁盛んなれども朱き実を見ず  
さるすべり花の重みにたわむ枝夏の無聊の庭かざりをり  
両智弁激闘あと閉会式無観客球場に吹奏おもし  
甲子園激闘へて会長辞「ゴール・グロース・グローリー」胸にと  
甲子園熱闘果てし日の夕べ今年も秋の虫すだくを聞く

三好聖三 垣々 伊

うわらり も覗るもともにいじること猫が斬蟻を投げる噛みつく  
かなへびの死骸が放置されている朝日のおよぶ縁側のふち  
雄たけびもガツツボーズも意のほかのふるまいとして走るかMは  
ホームラン撃ちたるのちも垣々とホームベースを踏みたりMは  
詩歌集の葉と残るブリューゲルの展覧会の半券がある  
娘らとゆくブリューゲル展の池袋1995・3・28  
シシトウに喉が火を噴く辛さかな水注ぎつつ喘ぐ晩食

御代田澄江 ふね遺産と文庫 茨

瀬戸内の島々巡る図書館船「ふね遺産」に認定と天声人語に  
わが家の私設の文庫「つばみ文庫」父より子らへの小遣ひもとに  
市報にも載りし小さきつばみ文庫近隣の子等と本読み合ひき  
ささやかなる文庫に水戸ユネスコ協会通し児童書百冊賜はりし日よ  
子等育ちゆき文庫仕舞ふに市に寄贈し良書多しとて全て受容さる  
地にありてコロナ第五波被る夜も空に半月煌煌と照る  
ミンミン蟬アブラ蟬とも声消えていつか初秋へ秋虫繁し

# 茂木斌

半寿なり

・埼

# 山野幸司

引揚げ

・沖

半寿なるわが怠慢のこのころを自強不息の四文字が撃つ

雨晴れてふたたび起る蝉の声穗田を隔てて聞こえ来るなり

空き煙を深く埋めし雑草のなかんづく背高泡立草の

立あふひ茎も大きな弓なりに夜去りの雨に上下座寸前

おふくろがよく口にせし「いたま様」飯玉神社訪ふこともなし

文春が中吊り広告中止する砲の見出しほは車内に読めず

処暑過ぎて届きしはがきコスモスの花描かれるて知り人なりき

# もとむらしげと

飛雄馬の球

・そ

貸本の漫画をつつめる風呂敷を虚に隠し夜の土砂降り

贈られし漫画数十冊を走る走る孝標の女の如くに読みき

おそ松の手にもつおでんに憧れぬ甘きお菓子の如く思いて

走りゆくエイトマンは速すぎるゆえ手も足も動いて見えず

壁穴を抜け木の瘤に当たりつつ又戻りくる飛雄馬の球

釣瓶より汲みあげし水の冷たさよ学校帰りの友の家にて

虎杖を摘みて食べたる日のありき通草も茱萸もはた道草も

# 山下雅子

平等

・習

みちのくに開戦の冬四年経て敗戦の夏 鮮明にあり

戦時中の無い無い尽くしを生き抜きしあの頑張りによきる平等

級友の父はビルマに戦死せり征きしまま父は消息不明

朝々の習いとなりぬ声高に 欲しがりません勝つまでは

春の野にいたどり はこべ あかざ摘み家庭科実習まあまあの味

空腹を忘れ合唱に熱中せりモーツアルトのパートかがやく

国挙げてのコロナ自粛の今よきる平等に耐えし戦時の苦痛

# 養学登志子

興味津津

・凌

籠り居の梅雨寒の日の届け物玄米の餅に興味津津

餅米の玄米の餅黄粉餅チーズ海苔巻今日は善哉

夏木立黒人ランナー立ちあがり熱き國より熱きかこの國

夜の網戸に鳴くもののいるやすけざよ朝の露台に絶えて伏せいぬ

あんな雲出で来て秋の空となる片方峰雲盛り上がりつつ

見当の蚊の音を打てど打てどはずれ針さす時は黙る から打つ

無表情なひとかそうでもなさうでなんもないことそれとなく言う

どうぞやと入り来たれるソ兵らの漁る音に身固くする  
雪の中そっと逃げ出す中庭の我らに迫るソ兵の声が

刻迫る出発間近人の群れ駅に食売る満人の声

わが君と契り幾年三人娘の絵の中笑うチユーリップあり

母となり子を従えば大地主雄雄同体ジャンボタニシは

人知れず逝きにし大久保三笑軒白磁・青磁の器が囁む

長雨に籠る山猿巒々と田畠を眺め歌うたいたり

## 横田敏子

ふる里

・福

◎ 本の紹介 ◎

朝顔は伸びに伸びたり梅の木の天辺に今朝一輪ひらく  
猪苗代湖の辺りに生れて十五にてふる里離り六十余年

みずうみに沈む夕日を眺めたる若き日の友逝きてはるけし  
冬の来る前に訪いたきふる里よわが知る人のすでに居らねど

わが想い伝わりし」と「磐梯と猪苗代湖」の兄の絵届く  
玄関にふる里の絵を飾りたり「只今」と帰ればそこはふる里

長月の長雨止みし朝より広がる空は秋の空なり

吉永惟昭 パラリンピック

・熊

耐えしかな乗り越えしかな人生の極みの祭パラリンピック  
障害をもろにさらさす競泳に何時しか我が目がそれでゆく  
ぶつかりの厳しきを期待していたにスピードがきめて車椅子ラグビー  
暗黒の闇に咲く音と感ブラインドサッカーワークを閉じてみる  
伴走者より速ければどうなるの心配になる長距離競走

健常者の記録と競う幅跳びに反撥しそうな義足の形相

障害の種類の多さに驚きぬ そうだ家内も アッ！ 俺もだ

久我田鶴子

七月三十日

・羊

ボケるには充分だねと笑ひつつ一ヶ月半の入院を言ふ

隣り合ふベッドの人の暴言に傷つけられてゐたるも言ひき  
パサパサの鮭にパサパサの鶏肉と病院食をくり返し言ふ

念願の稻庭うどん大ぶら付き駅ナカの店に嬉しさうなりき  
店員に食べ残せるを詫びてるきつねに増したる札儀正しさ

食べたきをみづから選びスーパーにわが持つ籠を満たしてゆけり  
瘦せただけ取りもどさむといふ」とくあれもこれもと籠に入れしも

著者が、二〇一二年から一〇一九年にかけて執筆・発表した短歌関係の文章をまとめた一冊である。

その中に、「抽象性と自意識」—小野茂樹の『整流器』と『私』に関する試論が収められている。初出は「立命短歌」第一号（一〇一四年十一月）。今回、この本に収めるに際して「記憶の断片」という文章を付しているが、そこにこんな言葉があつた。「この早熟の歌人には周囲に気を配りつつも我が道を曲げることはない、ある種の特異な氣質があるように感じられる。それが師系由来のものか、あるいは小野自身の性格ゆえのものかは分からぬが、彼の早すぎる死によって断たれてしまつた道筋が現代短歌の歴史の中に今も見え隠れしているような気がしてならない。」と。

出たばかりの角川「短歌」十月号には、この本の書評の掲載があり、魚村晋太郎氏が「著者の『私』をめぐる問題のたて方が最も明瞭に表れているのは『抽象性と自意識』—小野茂樹の『整流器』と『私』に関する試論」だろう」と述べている。

小野作品のもつ普遍性について、小野の早すぎる死によつて断たれてしまつた道筋とは何か、それはどこかでお流れ統けてはいないのか、あらためて考えてみたい。  
(久我)

濱松哲朗著『日々の鎖、日々の声』(私家版)

※なお、角川「短歌」十月号には、「短歌の底荷」のページに「地中海」の動向が載っています。是非一読を。